



群馬県コンクール 金賞

おにぎり

中之条町立中之条中学校 3年 菊田 翼

「また、おにぎりか……。」

弁当が入った袋を開けて、落胆する僕。そこに入っているのは、決まっておにぎりだ。僕は小学校に入る前から、今までずっとサッカーをしている。平日は練習で、土日には練習試合か試合がある。そういう生活を八年くらい続けている。土日の練習試合や試合には、いつも必ず持っていくものがある。それは、ボールとスパイク、ではなく弁当だ。朝早くに集合し、帰りは夕方になるため、弁当は欠かさず持って行く。僕は弁当を作ったことがない。それはいつも母がしてくれていた。誰よりも早く起きて、僕の弁当を用意してくれているのだ。しかし、弁当といっても、中身は大抵おにぎりだ。お米で具を包んで海苔で巻くだけの簡単なものだ。海苔も巻いてない、ただの塩おにぎりだったこともある。他の子の彩り豊かな弁当を見てよだれを垂らしながら、僕はおにぎりを食べていた。僕はこれまで、おにぎりがおいしいと感じたことは一度もなかった。嫌いでもなかったが、好きでもなかった。特別な思い出があるわけでもなかった。

しかし、僕のおにぎりに対する考え方は変わってきた。社会の授業でお米に関することを学んだ。日本人のお米の消費量が年々下がり続けており、国民一人当たりのお米の消費量は一九七〇年と比べて半分にまで減少していること。お米の消費が減ったため、消費量よりも生産量が増えてしまう「米あまり」という問題が起こり始めたこと。離農や高齢化による担い手不足など、日本の農業、お米には沢山の問題があることを知った。おにぎりを見て落胆していたのが、何だか申し訳なくなった。

最近は、おにぎりを見て、落胆することはない。寧ろ嬉しくなる。おにぎりのおいしさが分かり始めたからだ。サッカーで疲れた体を癒してくれるようなおいしさ。試合に負けた悔しさを温かく包みこんでくれるようなおいしさ。それが母の作ってくれるおにぎりにはある。試合や練習試合の前日、

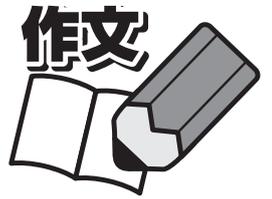
「明日のお昼は何がいい？」

と母に聞かれれば、僕は

「おにぎり」

と答える。毎回違った具を入れてくれるのも母の優しさだろう。周りの子は買ってきた弁当を食べている中、僕は母が作ってくれたおにぎりを食べている。多分、僕がいちばんおいしいものを食べているだろう。母の作るおにぎりはいつ食べてもおいしいのだ。

僕の家では、夕飯に必ずお米が出る。僕も米を研いだり、炊いたりすることがある。炊飯器の蓋を開けたとき、いつもお米に顔を近づけてしまう。炊飯器の蓋を開ける、その瞬間がた



まらなく好きだ。夕飯の食卓に並ぶのは、母が作った料理と茶碗に盛られたごはんだ。その食卓を家族で囲んで食べる。その時間が、いちばん幸せかもしれない。

こうして自分の生活を振り返ると、お米とずっと関わり続けている。それはこれからも同じだろう。そんな当たり前にお米がある生活が送れることに感謝したい。お米を作る農家の方々、お米を僕の身の回りに運んでくれる方々、そしてお米を食べられるよう働いてくれたり、おにぎりを作ってくれたりする父や母、僕がお米を食べることができるのは、こうした人たちのおかげだ。その全ての人に感謝を忘れずに過ごしていきたい。

「ご飯だよー。」

母の声に、今日も真っ先に階段を駆け下りる。

